

校異源氏物語・にほふ兵部卿

ひかりかくれ給にし後かの御影にたちつき給へき人そこらの御すゑすゑにあり
かたかりけりおりゐの御門をかけたてまつらんはかたしけなしたうたいの三宮
そのおなしおとゝにておひいて給し宮のわか君と此二所なんとりゝにきよら
なる御名とり給てけにいとなへてならぬ御有さまともなれといとまはゆきゝは
にはおはせさるへしたゝよのつねの人さまにめてたくあてになまめかしくおは
するをもとゝしてさる御なからひに人の思きこえたるもてなし有さまもいにし
への御ひゝきけはひよりもやゝたちまさり給へるおほえからなむかたへはこよ
なういつくしかりけるむらさきの上の御心よせことにはくゝみきこえ給し故三
宮は二条院におはします東宮をはさるやむことなき物をきたてまつりたまて
御門きさきいみしうかなしうしたてまつりかしつきゝこえさせ給宮なればうち
すみをせさせたてまつり給へと猶心やすき古さとにすみよくし給なりけり御元
服し給ては兵部卿ときこゆ女一の宮は六条院南のまちのひんかしのたいを其世
の御しつらひあらためすおはしまして朝夕に恋忍ひきこえ給二宮もおなしおと
ゝのしん殿を時々の御やすみ所にし給て梅つほを御さうしにしたまふて右のお
ほい殿の中ひめ君をえたてまつり給へりつきの坊かねにていとおほえことにを
もゝしう人からもすくよかになん物し給けるおほい殿の御むすめはいとあま
たものしたまふ大ひめ君は東宮にまいり給て又きしろふ人なきさまにてさふら
ひ給ふそのつきゝゝなをみなつゐてのまゝにこそはと世の人も思きこえきさい
の宮ものたまはすれと此兵部卿の宮はさしもおほしたらす我御心よりおこらさ
らむ事などはすさましくおほしぬへき御気色なめりおとゝもなにかはやうのも
のときのみうるはしうはとしつめ給へとまたさる御けしきあらむをはもてはな
れてもあるましうおもむけていといたうかしつきゝこえ給六の君なんその比の
すこし我はと思のほり給へるみこたち上達部の御心つくすくさはひにものし給
けるさまゝつとひ給へりし御方ゝなくゝつゐにおはすへきすみかともに
みなおのゝうつろひ給しに花ちるさとゝきこえしは東の院をそ御そうふむ所
にてわたり給にける入道の宮は三条宮におはしますいまきさきはうちにのみさ
ふらひ給へは院のうちさひしく人すくなに成にけるを右のおとゝ人の上にてい

にしへのためしをみ聞にもいけるかきりの世に心をとゝめてつくりしめたる人の家ゐのなこりなくうちすてられて世のなこりもつねなくみゆるはいとあはれにはかなさしらるゝをわか世にあらんかきりたに此院あらさすほとりのおほちなど人かけかれはつましうとおほしのたまはせてうしとらのまぢにかの一条の宮をわたしたてまつり給てなむ三条殿と夜ことに十五日つゝうるはしうかよひすみ給ける二条院とてつくりみかき六条の院の春のおとゝとて世にのゝしる玉のうてなもたゝひとりの御末のため成けりとみえて明石の御方はあまたの宮たちの御うしろみをしつゝあつかひきこえ給へりおほいどのはいつかたの御事をもむかしの御心をきてのまゝにあらためかはる事なくあまねきおや心につかうまつり給にもたいの上のかやうにてとまり給へらましかはいかはかり心をつくしてつかうまつりみえたてまつらましつゝるにいさゝかもとりわきて我心よせとみしり給へきふしもなくてすき給にし事をくちおしうあかすかなしう思出きこえ給あめのしたの入院を恋きこえぬなくとにかくにつけても世はたゝ火をけちたるやうになに事もはへなきなきをせぬおりなかりけりまして殿のうちのひと御方ゝ宮たちなどはさらにもきこえすかきりなき御事はさる物にて又かのむらさきの御有さまを心にしめつゝよろつの事につけて思出きこえ給はぬ時のまなし春の花のさかりはけになかゝらぬにしもおほえまさる物となん二品宮のわか君は院のきこえつけ給へりしまゝに冷泉院の御門とりわきておほしかしつき後の宮もみこたちなどおはせす心ほそうおほさるゝまゝにうれしき御うしろみにまめやかにたのみきこえ給へり御元服なども院にてせさせ給十四にて二月に侍従になり給ふ秋右近中将に成て御たうはりのかゝいなどをさへいつこの心もとなきにかいそきくはへておとなひさせ給おはしますおとゝちかきたいをさうしにしつらひなとみつかから御覧しいれてわかき人もわらはしもつかへまてすぐれたるをえりとゝのへ女の御きしきよりもまはゆくとゝのへさせ給へりうへにも宮にもさふらふ女房の中にもかたちよくあてやかにめやすきはみなうつしわたさせ給つゝ院のうちを心につけて住よくありよく思へくとのみわさとかましき御あつかひくさにおほされ給へり故ちしのおほい殿の女御ときこえし御腹に女宮たゝ一所おはしけるをなむかきりなくかしつき給御ありさまにおとらすきさいの宮の御おほえのとし月にまさり給けはひにこそはなどかさしもとみるまてなんはゝ宮は今はたゝ御をこなひをしつかにし給て月の御念仏年に二たひの御八講おりゝのたうとき御いとなみはかりをし給てつれゝにおはしませは此君の出入給ふをかへりておやのやうにたのもしき影におほしたれはいと

あはれにて院にも内にもめしまとはし春宮もつきくの宮達もなつかしき御あそひかたきにてともなひ給へはいとまなくくしくいかて身をわけてしかなと覚給けるをさな心ちにほのき、給しことのおりくいふかしうおほつかう思わたれと問へき人もなし宮にはことのけしきにてもしりけりとおほされんかたはらいたきすちなればよと、もの心にかけていかなりける事にかはなにの契にてかうやすからぬ思そひたるみにしもなりいてけんせんけうたいしの我身にとひけんさとりをもえてしかなとそひとりこたれ給ひける

おほつかな誰にとはましいかにしてはしめもはてもしらぬ我身そいらふへ

き人もなしことにふれてわか身につ、かある心ちするもた、ならす物なけかしくのみ思めくらしつ、宮もかくさかりの御かたちをやつし給てなにはかりの御道心にてかにわかにおもむき給けんかくおもはすなりける事のみたれにかならずうしとおほしなるふしありけん人もまさにもりいてしらは猶つ、むへき事のきこえによりわれにはけしきをしらす人のなきなめりとおもふ明くれつとめ給やうなめれとはかなくおほとき給へる女の御さとのほどにはちすの露もあきらかに玉とみかき給はんこともかたしいつ、のなにかしも猶うしろめたきをわれ此み心ちをおなしうは後の世をたにおもふかのすき給ひけんもやすからぬ思にむすほ、れてやなどをしはかるに世をかへてもたいめむせまほしき心つきて元服は物うかり給けれとすまひはてすをのつから世中にもてなされてまはゆきまてはなやかなる御身のかさりも心につかすのみ思しつまり給へり内にもは、宮の御方さまの御心よせふかくていとあはれなる物におほされきさいの宮はたもとよりひとつおと、にて宮たちももるともおひいてあそひ給し御もてなしをさくあらため給はす末にむまれ給て心くるしうおとなしうもえみをかぬ事と院のおほしの給ひしを思出きこえ給つ、おろかならす思きこえ給へり右のおと、もわか御子ともの君たちよりも此君をはこまやかにやうことなくもてなしかしつきたてまつり給ふむかし光君ときこえしはさる又なき御おほえなからそねみ給人うちそひは、方の御うしろみなくなと有しに御こ、ろさま物ふかく世中をおほしなためし程にならひなき御光をまはゆからすもてしつめ給ひつゐにさるいみしき世のみたれもいてきぬへかりし事をもことなくすくし給て後の世の御つとめをもくらかし給はすよろつさりけなくてひさしくのとけき御心をきてにこそありしか此君はまたしきに世のおほえいとすきて思あかりたる事こよなくなどそのし給ふけにさるへくていとこの世の人とはつくりいてさりけるかりにやとれるかともみゆることそひ給へりかほかたちもそこはか

といつこなむすぐれたるあなきよらとみゆる所もなきかたゝいとなまめかしう
はつかしけに心のおくおほかりけなるけはひの人にゝぬなりけり香のかうはし
さそ此世のにほひならすあやしきまてうちふるまひ給へるあたり遠くへたゝる
ほとのをい風にまことに百ふのほかもかほりぬへき心ちしけるたれもさはかり
になりぬる御有さまのいとやつれはみたゝありなるやはあるへきさまゝに我
人にまさらんとつくりひよういすへかめるをかくかたはなるまてうちしのひた
ちよらむものゝくまもしるきほのめきのかくれ有ましきにうるさかりてをさ

くゝとりもつけ給はねとあまたの御からひつにうつもれたる香のかともゝ此君
のはいふよしもなきにほひをくはへおまへの花の木もはかなく袖ふれ給ふむめ
の香は春さめのしづくにもぬれ身にしむる人おほく秋の野にぬしなきふちはか
まもものかほりはかくれてなつかしきをひ風ことにおりなしからなむまさり
けるかくいとあやしきまて人のとかむる香にしみ給へるを兵部卿の宮なんこと
事よりもいとましくおほしてそれはわさとよろつのすぐれたるうつしをしめ給
ひ朝夕のことわさにあはせいとなみ御前のせんさいにも春は梅花そのをなかも
給秋はよの人のめつる女郎花さをしかのつまにすめる萩の露にもをさゝ御心
うつし給はす老をわするゝ菊におとろへ行藤はかま物けなきわれもかうなどは
いとすさましき霜かれのころをひまておほしすてすなとわさとめきて香にめつ
る思をなんたてゝこのましうおはしけるかゝる程にすこしなよひやはらきてす
いたる方にひかれ給へりと世の人は思きこえたりむかしの源氏はすへてかくた
てゝその事とやうかはりし給へる方そなかりしかし源中将此宮にはつねにま
いりつゝ御あそひなどにもきしろふ物のねをふきたてけにいとましくもわかき
とち思かはし給ふつへき人さまになん例の世人はにほふ兵部卿かほる中将とき
ゝにくゝいひつゝけてその比よきむすめおはするやうことなき所ゝは心ときめ
きにきこえこちなとし給もあれは宮はさまゝにおかしうも有ぬへきわたりを
はの給ひよりて人の御けはひありさまをもけしきとり給ふわさと御心につけて
おほすかたはことになかりけり冷泉院の女一の宮をそさやうにてもみたてまつ
らはやかひありなんかしとおほしたるはゝは女御もいとをもく心にくゝ物し給
あたりにてひめ宮の御けはひけにいと有かたくすぐれてよそのきこえもおほし
ますにましてすこしちかくもさふらひなれたる女房などのくはしき御有さまの
ことにふれてきこえつたふるなともあるにいとゝ忍ひかたくおほすへかめり中
將は世中をふかくあちなき物に思すましたる心なれは中ゝ心とゝめて行は
なれかたき思やのこらむなとおもふにわつらはしきおもひあらむあたりにかゝ

つらはんはつゝましくなと思すて給さしあたりて心にしむへきことのなきほと
さかしたつにや有けむ人のゆるしなからん事などはまして思よるへくもあらず
十九になり給とし三位の宰相にて猶中将もはなれず御門きさきの御もてなしに
たゝ人にてはゝはかりなきめてたき人のおほえにて物し給へと心の中には身を
思しるかたありて物あはれになともありければ心にまかせてはやりかなるすき
事をさゝこのますよろつの事もてしつめつゝをのつからおよすけたる心さま
を人にもしられ給へり三宮の年にそへて心をくたき給ふめる院のひめ宮の御あ
たりをみるにもひとつ院の中にあけくれ立なれ給へはことにふれても人の有さ
まをきゝみたてまつるにけいとなへてならず心にくゝゆへゝしき御もてな
しかきりなきをおなしくはけにかやうなる人をみんにこそいけるかきりの心ゆ
くへきつまなれと思なから大かたこそへたつる事なくおほしたれひめ宮の御方
さまのへたてはこよなくけ遠くならはさせ給もことはりにわつらはしければあ
なちにもましらひよらずもし心より外の心もつかは我も人もいとあしかるへ
き事と思しりて物なれよる事もなかりけりわかゝく人にめてられんとなり給へ
る有さまなれはゝかなくなけのこと葉をちらし給ふあたりもこよなくもてはな
るゝ心なくなひきやすなるほとにをのつからなをさりのかよひ所もあまたにな
るを人のためにことごとしくなともてなさいとよくまきはしそこはかとな
くなさけなからぬほとの中ゝ心やましきを思よれる人はいさなはれつゝ三条
の宮にまいりあつまるはあまたありつれなきをみるもくるしけなるわさなめれ
と絶なんよりは心ほそきに思わひてさもあるましきゝはの人ゝのはかなき契
にたのみをかけたるおほかりさすかにいとなつかしうみ所ある人の御有さまな
れはみる人みな心にはからるゝやうにてみすくさる宮のおはしまさむよのかき
りは朝夕に御めかれす御覧せられみえたてまつらんをたにとおもひの給へは右
のおとゝもあまた物し給御むすめたちをひとりゝはと心さし給なからえこと
にいてたまはすさすかにゆかしけなきなからひなるをとと思なせと此君たちを
おきて外にはなすらひなるへき人をもとめいつへき世かはとおほしわつらふや
むことなきよりも内侍のすけ腹の六の君とかいとすくれておかしけに心はへな
ともたらひておひいて給ふを世のおほえのおとしめさまなるへきしもかくあた
らしきを心くるしうおほして一条の宮のさるあつかひくさもたまへらてさう
ゝしきにむかへとりてたてまつり給へりわさとはなくてこの人ゝにみせそめ
てはかならず心とゝめ給てん人の有さまをもしる人はことにこそあるへけれな
とおほしていといつくしくはもてなし給はすいまめかしくおかしきやうにもの

このみせさせて人の心つけんたよりおほくつくりなし給ふのり弓のかへりある
しのまうけ六条院にていと心ことにし給てみこもおはしませんの心つかひ
し給へりその日みこたちおとなにおはするはみなさふらひ給きさい腹のはいつ
れともなくけたかくきよけにおはします中にも此兵部卿の宮はけにいとすくれ
てこよなうみえ給ふ四のみこひたちの宮ときこゆる更衣腹のは思なしにやけは
ひこよなうおとり給へり例の左あなちにかちぬれいよりはとく事はてゝ大将
まかて給兵部卿宮ひたちの宮きさき腹の五の宮とひとつ車にまねきのせたてま
つりてまかて給宰相中将はまけかたにてをとなくまかて給にけるをみこたちお
はします御をくりにはまいり給ふましやとをしとゝめさせて御子の右衛門のか
み権中納言右大弁などさらぬ上達部あまたこれかれにのりましりいさなひたて
ゝ六条院へおはす道のやゝ程ふるに雪いさゝかちりてえむなるたそかれ時也物
のねおかしきほどにふきたてあそひて入給ふをけにこゝをゝきていかならむ仏
の国にかはかやうのおりふしの心やり所をもとめむとみえたりしん殿の南のひ
さしにつねのこと南むきに中少将つきわたり北向にむかひてゑかのみこたち上
達部の御座あり御かはらけなどはしまりて物おもしろく成行にもとめこまひて
かよる袖ともものうちかへすは風に御前ちかき梅のいいたくほころひこぼれた
るにほひのさとうちゝりわたれるに例の中将の御かほりのいとゝしくもてはや
されていひしらすなまめかしはつかにのそく女房なともやみはあやなく心許な
きほとなれと香にこそけに似たる物なかりけれとめてあへりおとゝもいとめて
たしとみ給ふかたちようゑも常よりまさりてみたれぬさまにおさめたるをみて
右のすけもこゑくはへ給へやいたうまらうとたゝしやとのたまへはにくからぬ
程に神のますなど